

東日本支部だより

2022 年 11 月 10 日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

今後の例会予定

第 130 回 定例研究会

2022 年 12 月 3 日(土) オンライン開催※

第 131 回 定例研究会

2023 年 2 月 4 日(土) オンライン開催

研究発表ほか

※の詳細は下記↓↓↓(■定例研究会のお知らせ■)をご覧ください。



東洋音楽学会

第 130 回定例研究会

申し込みフォーム QR コード

○報告

1. 芸の転換

—上七軒楓錦会の誕生—

中原 逸郎 (楓錦会)

○研究発表

2. 植民地朝鮮における音楽文化のトランスカルチャー

—京城放送局(JODK)音楽番組を事例に—

金 志善(日本学術振興会特別研究員 RPD・東京大学)

司会:海野 るみ(南九州短期大学)

■定例研究会のお知らせ■

◆東日本支部 第 130 回定例研究会

時 2022 年 12 月 3 日(土) 14:00~16:30

所 Zoom によるオンライン開催(事前申込制)

申込締切 2022 年 11 月 26 日(土)

申込み方法の詳細は支部 HP でご確認ください。なお、右記

Q コードから直接お申込みいただくことも可能です。お申込

後にミーティングコード等をお送りします。

■定例研究会の報告■

◆東日本支部 第128回定例研究会

時 2022年6月4日(土) 13:00~15:40

所 Zoomによるオンライン開催

司会 配川 美加(日本女子大学)

○修士論文発表(その3)

1. 組織を形成した技術者たちによる国産ピアノの模索

—1936年「躍進国産ピアノ展」を中心に—

神村 かおり(一橋大学大学院)

(発表要旨)

日本のピアノ産業の歴史についての考察は近年充実してきているが、その多くはピアノメーカーの経営史という側面が大きく、楽器そのものに携わる技術者に焦点を当てた研究はまだ少ない。本研究では1931年に設立された「全国ピアノ技術者協会」の会報をもとに1930年代のピアノ技術者の取り組みに着目した。その中で特に注目すべきは協会が主催するピアノの展覧会である。先行研究ではピアノの生産量のピークである1937年を前に、調律師の存在感が高まったことを象徴するイベントとして紹介されるが、果たしてなぜ技術者がこのような企画を催すに至り、成功を収めることができたのだろうか。

これらを明らかにするために第一章ではまず協会設立までのピアノ業界の動きを振り返った。1926年の日本楽器労働争議により独立した技術者たちと、アメリカで調律技術を習得し帰国した技術者たちの出会いが協会設立への動きを加速させた。第二章では日本では明治以降「楽器を展示する」という取り組みが殖産興業と大衆への啓蒙という文脈で行われてきたことを明らかにした。

そして第三章ではピアノ展が行われた1930年代に始まった「音楽週間」という愛国運動と、教育音楽関係者や音響物理学者たちとピアノ技術者との関わりが絡み合っ、多様な

展示物を一堂に会した「躍進国産ピアノ展」を開催したことを明らかにした。すなわちピアノ技術者による展覧会は、生産量高まる国産ピアノメーカーの産業的な躍進を示すだけでなく、西洋音楽の歴史や音響の研究分野として日本のピアノ文化が躍進している様子を大衆に啓蒙する機能も担った。そのような多角的な展示を可能にしたのは、協会が所属の垣根を越えて構成されたことにある。大手メーカー、中小メーカー、学校所属、フリーランス、様々な技術者が技術交流を行う場の構築を模索し、少しずつ規模を拡大し、集大成として「躍進国産ピアノ展」が実現されたのである。

今後の課題は、戦後にも再び開催された「ピアノ展」が「愛国運動」という後ろ盾を失い、どのように変容したのかを明らかにすることである。

(傍聴記:齊藤 紀子)

ピアノの設計、製造、調律、修理に関わった日本人を「技術者」と位置づけ、躍進国産ピアノ展(1936年)に着目した発表であった。愛国運動の一環として言及される本展示には、東京音楽学校や理化学研究所とのつながりもいさかされていたこと、この展示会に先立ち、国産ピアノ研究会(1932年)と称して競合他社が一堂に会しての共同研究が行われていたことなどが具体的に提示された。

フロアからは、1-2万人が来場したということだが、大衆向けのピアノの宣伝効果として、実際に普及・促進したのかという質問が出た。これに対し神村氏は、販売・営業については未調査であるが、ピアノの製造台数は翌年にピークを迎えていると回答した。また、ピアノの啓蒙活動として楽器の展示以外のアプローチがあったのかという質問に対しては、湿気対策などについて書かれた保存法の冊子が配布されたとの回答があった。メンテナンス技術の習得過程や、後継者の育成について詳細に調査されることを期待する。

○博士論文発表

2. 村治虚憧の六孔尺八の研究

—その創案と影響—

村治 学(聖徳大学大学院)

(発表要旨)

本研究の目的は村治虚憧という一人の音楽家を取り上げその活動を詳細に検討して彼を昭和時代に位置づけることである。本論文において筆者は以下の三点について考察し明らかにする。第一点は尺八村治流を創始した村治虚憧の音楽性について、第二点は虚憧が自身の理想とした音楽を具現化するために開発した純律尺八について、第三点は虚憧が当時の尺八界及び、現代の尺八界に与えた影響について。

尺八は江戸時代には禅宗の法器とされたが明治維新により一般大衆に開放され西洋音楽の影響を受けた都山流によりステージ音楽へと変貌をはかる。村治虚憧は1894年に生まれ1913年都山流に入門、1919年上田流に転門、1928年一般的な尺八を使用し「ものいふ尺八」を標榜して独立する。虚憧は尺八で様々な様式の音楽を演奏することに積極的であったが1952年独自の六孔尺八を考案、新楽器のための一連の楽曲を調和楽とする。

論文全体の構成は、序論、第1章「村治流に至る尺八家元の流れ」、第2章「尺八手付の比較」、第3章「尺八の改良の歴史」、第4章「純律尺八」、結論とした。第1章では虚憧が関わった三つの尺八の流派を「技・梓・我」の観点から比較を行い虚憧が独立した動機と経緯について考察した。第2章では3つの流派の音楽的特徴を比較するため同一曲に対する各流派の手付を比較し差異の抽出を試行した。第3章では明治以降の尺八改良の歴史を振り返り尺八改良の目的・成果・限界を明らかにした。第4章では虚憧が箏曲の旋律分析により新楽器開発を行った経緯と尺八界の反応から当時とその後の尺八界に村治虚憧が一定の影響を与えた事実を考察し

た。筆者は虚憧の最大の功績は新楽器開発において尺八の伝統を損なわずに補孔を追加したことよりも基音と第三孔の五度関係を厳守させ法器から楽器へと脱皮させたことにあると結論づけた。本論文には村治虚憧と村治流に関する以下の資料を添付する。

・村治虚憧著『尺八の新研究』翻刻 ・村治虚憧原稿集 ・マスメディアに表れる村治虚憧の活動及び年表 ・村治流楽譜公刊録 ・村治虚憧著村治流本曲譜面集 ・村治家家系図

(傍聴記: 神 令)

明治四年の諸政改革を受けて、普化宗の廃宗や三曲合奏の興隆、西洋音楽の導入と普及等、尺八を演奏する環境の変化はもちろんのこと、社会全体の生活習慣や音楽の在り方も劇的に変わっていくこの時代において、既存の音楽概念から脱却した、新たな尺八音楽の在り方を模索し続けた尺八家の村治虚憧について、「純正六孔尺八」という多孔尺八の研究開発を中心とした功績を考察する本論文。生い立ちから創流、音楽的思想や楽器の改造などの変遷から、「ものいう尺八」「調和楽」という村治虚憧独自の世界観に至るまでの基本文献となるべき貴重な資料の数々である。先行研究の数少ない多孔尺八の論文において、今後の研究の礎となるであろう。また、同時代の尺八家である堀井小次郎、福田蘭童、柴田聖山、神如道など、楽器の開発や和声的音楽への挑戦を行った者達との、比較研究等の出現も今後は期待したい。それら未来の研究への布石として大変貴重な発表であった。

3. 第二次世界大戦前後における薩摩琵琶の変動

—圓須岡井・ラジオ・レコード調査と音楽分析を通して—
曾村 みずき(東京藝術大学大学院)

(発表要旨)

本研究は、1930～40年代を中心とした第二次世界大戦前後において、薩摩琵琶の演奏家の活動状況および薩摩琵琶の音楽内容がどのように変化したのかを、演奏会・ラジオ・レコードにおける演奏活動状況の調査と、戦前から戦後にかけての演奏スタイルの変遷および戦争を題材とした新作曲に注目した音楽分析を通して明らかにすることを目的としている。本発表では、博士論文第4章のレコード調査を取り上げた。

本研究では、主要レコード会社5社(コロムビア・ビクター・ポリドール・キング・テイチク)を対象に、近代琵琶(薩摩琵琶・筑前琵琶およびそれらの諸派を含む)の戦前SPレコードおよび戦後LPレコードの発売記録を調査した。本発表では調査結果から、(1)発売タイトル数の推移、(2)曲目、(3)演奏者の3点に注目し、それぞれの特徴を述べた。

(1)大正期までの琵琶人気がある程度継続し、1930年代半ば頃まで発売数が多く確認できた。日中戦争開戦後には、テイチクから時局レコードが多数発売されたが、終戦前にレコード生産は休止された。戦後期は1961年から琵琶レコードの発売が再開され、琵琶楽全体を含む全集レコードや、演奏家個人に焦点をあてた新収録の音源が各社から発売された。

(2)収録曲は、戦前・戦後期ともに薩摩琵琶、とりわけその一流派である錦心流で人気となった楽曲や題材が選択された傾向がみられ、大正期までに人気を誇った錦心流宗家・永田錦心の影響が推察された。一方、戦前期に確認できた日清・日露戦争を題材にした楽曲は、厭戦機運から戦後にはほとんど発売されなかった。

(3)戦後の琵琶界では若手演奏家があまり育たず、既収録音源の復刻盤を含む、戦前で活躍した演奏家によるレコード発売が多く確認できた。一方で、戦後に成立した鶴田流の創始者・鶴田錦史は、器楽性に注目した音楽的改革を行い、現代邦楽での成功をきっかけとして、薩摩琵琶の古典曲のレコード収録の機会を得た。

以上より、戦後は琵琶界の顔触れが固定化したことや、音楽的な発展がしばらくみられなかったことで、琵琶楽の復興はやや遅れた。その一方で、戦後の全集レコード制作により、戦前には同時代の音楽として享受されていた薩摩琵琶が、戦後には伝統音楽の一つとして「古典化」していったといえよう。さらに、新流派による薩摩琵琶の新たな音楽性がレコードにより普及したことで、薩摩琵琶の音楽そのものが再評価されて、終戦前後にあった戦争イメージの払拭につながったと考えられる。

(傍聴記:ヒュー・デフェランティ)

発表者はまず研究の背景、目的、方法と対象を述べた。時間制限のため、第4章の録音調査のみの内容を細かく述べた。つまり5社の琵琶のレコードの発売データと特徴、1960年代に出た「日本の伝統音楽」と位置づけられる琵琶楽の「全集物」、戦後に収録された曲目と演奏家たちや戦前収録の再発売の傾向、そして鶴田流による新たな「音楽性」が現れたことを示した。質疑応答では、水藤、榎本、鶴田が設立した新流派の先行者である「正派」の吉村岳城そして永田錦心の録音を、それぞれ卒論と修論で採譜して分析したことがあったため、博論には含まれていないと説明した。また、戦後に田辺尚雄他の研究者たちによる新たな琵琶の特徴化、あるいは鶴田錦史と武満徹が共同で発明した革新的な琵琶のエッセティックを日本社会の「反戦争」転換の中で評価する必要が指摘された。今後、発表者は(筑前琵琶も入れて)近代琵琶の音楽変動の網羅的記述を書くにあたって、この

文化・社会史の背景をしっかりと融合した説を十分に期待できると思う。

4. 日中戦争下の音楽交渉

—日本占領下の北京における音楽活動に着目して—

鄭 曉麗(東京藝術大学大学院)

(発表要旨)

本論文は、1937年から1945年までの日本占領下の北京における音楽活動に焦点を当て、占領空間における音楽活動の実態を明らかにし、日中戦争下における日中音楽交渉の一側面を提示することを目的とする。

第1章では、中華民国から占領期までの北京音楽史(1912-1937)を記述した。第2章では、日本占領下の北京における「音楽工作」の実態を明らかにした。日本の傀儡政府である中華民国臨時政府が、日本化教育のための音楽講座や新民歌曲の応募、ならびにそれらの強制的な普及により、臨時政府のイデオロギーを大衆に浸透させようとしていた。さらに北京中央放送局のラジオ放送番組を分析した結果、日本側が西洋音楽を中心に用いた「音楽工作」を通して、戦時下の「日中親善」を深める意図を持っていたことが明らかになった。

第3章では、占領下の北京における日本人音楽家(北支那方面軍軍楽隊、東京音楽学校の卒業生、藤原義江、山田耕筰等)の音楽活動を明らかにした。第4章では、占領下の北京における中国人・台湾人および欧米人音楽家の音楽活動に注目した。新たに発見した史料に基づき、江文也の歌曲を中心とする演奏活動の実態を明らかにした。加えて、中国人・欧米人音楽家が主催した慈善演奏会では、宗教音楽をテーマとした演奏会が多く開催されたことがわかった。

日本占領下の北京における音楽活動では、西洋音楽が支配側の「音楽工作」を浸透させるための重要な手段として用いられた。一方で西洋音楽は、被支配側における戦争への

抵抗、ないしはそれに対する消極的・受動的な協力にも大きな役割を果たしていた。いわば西洋音楽による「音楽交渉」が、非対称関係にある両者に刺激を与えつつ、両者が文化的に浸透し合う現象をももたらしていたのである。結果として、抗日音楽を禁止された北京の占領空間において、支配側や被支配側の間には「中立」と見られる西洋音楽を通じた「音楽交渉」の発生が、戦時下の北京における西洋音楽の意外な発展を促進したと言えるだろう。

(傍聴記:金 志善)

本発表は、日本占領が行われた1937年～45年に北京を中心に日中音楽交渉がどのように行われていたのか、その実態の一側面について「音楽工作」に焦点を当て、新民会・東亜文化協議会・北京中央放送局・北京音楽文化協会の活動や日本化教育、楽団統制を事例に明らかにした。質疑応答では、北京で日本音楽の演奏会は開かれていたのか、新民会はどのようなイデオロギーとして位置付けられるのかなどの質問があり、北京では長唄、尺八、日本舞踊、歌舞伎などの公演が開かれていたという。また、新民会のイデオロギーは儒教に基づいており、「新民歌曲」の歌曲は西洋音楽をベースとして中国人が歌えるようにしていたという。日本の占領地における音楽関連研究が進行している中、本研究は中国北京を中心とした新たな事例を取り上げたことで、日中近代音楽史研究に大きな発展をもたらしたと言えよう。

5. ラオス中部ラオトウンのラム歌唱の民族誌

—グローバル状況下にもみる五感統合とデジタル化をめぐる身体感覚の現在—

平田 晶子(東京外国語大学大学院)

(発表要旨)

本報告は、申請者が2021年3月に東京外国語大学大学院総合国際学研究所より学位授与された博士論文の一部(第5, 6, 7章)で、文化人類学における音楽研究の枠組みにおいて、在来音楽配信のオンライン化の問題を取り上げ、感覚を活かした音楽経験について考察した。具体的な研究対象には、ワールドミュージックの世界音楽市場に流通するモータム音楽において、その存在が十分に指摘されてこなかった山地ラオのラム歌謡を事例として選んだ。

ラオスは19世紀後半から20世紀半ばまで仏領インドシナ支配下に置かれており、1953年のフランスからの独立以降、国内で王政支持派と革命派の二派に分かれ、長きに亘る闘争が続いてきた。山地の人びとは、生き延びるために低地ラオの文化(言語や仏教宗教)も取り入れ、本来信仰してきた祖先霊と低地ラオから持ち込まれた守護霊に対してそれぞれ別の旋律で演奏をしながら、今日でも山地ラオの言語で歌われるラム歌謡(ラム・クロンニョ)を歌い続けている。第5, 6章では、霊供養儀礼での音楽経験が五感とともにあることを分析し、視・聴の他、演奏される場の匂いや触感について指摘した。

しかし、国家統一を目指した1975年の革命以降、国内では、一党独裁の社会主義政権が樹立し、目下進行中の国民国家建設が取り組まれていった。1986年に打ち出された「新思考(チンタナーカーン・マイ)」と呼ばれる市場経済化への経済改革は、音楽業界の民間企業の復活を促し、娯楽音楽産業も徐々に盛り上がりを見せ始める。2000年以降になると、ラオスも高度情報化社会を受容することになり、世界規模で加速的に進む在来音楽のオンライン化という近代化を経験

することになっていった。本来、五感とともに経験してきた山地民の在来音楽の実演は、CDやVCD等の他、オンライン上で視聴されることになり、五感のうち視聴覚だけに限られつつも、それを視聴する人々は既に身に付けた知識や情報、イメージを重んじる経験的身体で反応していることが明らかとなった。

(傍聴記:井上 さゆり)

本研究は山地ラオのラム歌謡について注目したもので、本発表では特に博論の第5, 6, 7章について紹介された。その中で、音楽経験が五感と関わる形でされていること、デジタルメディアを通しての音楽消費により様相が変化していることが指摘された。

人びとは生き延びるために低地ラオの文化も取り入れ、本来信仰してきた祖先霊と低地ラオから持ち込まれた守護霊に対してそれぞれ別の旋律で演奏をしているという。そして、霊供養儀礼での音楽経験が五感とともにあることを分析し、視・聴の他、演奏される場の匂いや触感について述べられた。そのような音楽が、CD等の他オンライン上で視聴されることで、五感のうち視聴だけに限られつつも、それを視聴する人々は既に身に付けた知識や情報、イメージを重んじる経験的身体で反応していることが指摘された。本発表では時間の制約上省略された音楽経験と五感に関する個別の事例など、来年の出版後に全体を読むのが非常に楽しみである。

◆東日本支部 第 129 回定例研究会

時 2022 年 7 月 2 日(土) 14:00～16:10

所 Zoom によるオンライン開催

司会 デュラン、ステファン・アイソル(日本学術振興会特別
研究員 PD・大阪大学)

○研究発表

1. 植民地朝鮮における日本人と日本音楽

—新聞・ラジオ放送からみる普及・享受・展開—

金 志善(日本学術振興会特別研究員 RPD・東京大学)

(発表要旨)

本発表の目的は、植民地朝鮮(1910～1945)における日本人が享受していた音楽の中、最も人気のあった日本音楽の享受実態を『京城日報』(日本語版、1906～1945)や京城放送局(JODK)プログラムなどの当地のメディア情報を手掛かりに明らかにし、日本外地に移住していた日本人の娯楽・慰安の実態を迫ることで約100年前の音楽文化享受実態の様子を描き出すことである。朝鮮に移住した日本人の中には朝鮮を拠点に活動を行う音楽家(邦楽家も含む)が数多く存在しており、演奏、教育、執筆活動などを行っていた。また、日本本土から訪れる多くの音楽家による公演も多く実現していた。植民地朝鮮には朝鮮在来の音楽に加え、西洋音楽と日本音楽、大衆音楽が混在する状況が生み出されていた。このような状況の中で、在朝鮮日本人が最も好んでいた音楽は、日本音楽であったとされる。これについては、聴取料で運営していたラジオの特質上、聴衆者の趣向を敏感に反応しなければならなかった京城放送局(JODK)の音楽プログラムの比率からも確認できる。『京城日報』や京城放送局(JODK)の音楽プログラムなどのメディア情報を通じて、在朝鮮日本人は最も慰安できる日本音楽の情報を得て、享受できる手段として利用していた。しかし、植民地朝鮮を含む、日本外地における日本人の音楽享受実態については、いく

つかの事例研究があるものの、まだ明らかにされてこなかった。本発表では、朝鮮に移住者・植民者であった「在朝鮮日本人の日本音楽の享受」に焦点を絞り、当地のメディア情報を基に実態究明をすることで、今までの先行研究との差別化を計り、植民地朝鮮の音楽文化状況の一端を明らかにする。また、植民地朝鮮における日本音楽が日韓近代音楽史においてどのような意義を持つのか総合的に考察する。

(傍聴記:劉 麟玉)

金志善氏は、まず朝鮮人と在朝鮮日本人の人口比、識字率、ラジオの普及率などを比較し、次に1920年代のラジオ番組を概観した。日本音楽の放送回数が最も多く、その大半が内地からの中継であったことを示した。また、日本内地からの人形浄瑠璃と歌舞伎の興行を扱い、演奏旅行の経緯、演目の概要等を述べた。『京城日報』の情報の膨大さに立ち向かった金氏の努力に敬意を表す。しかし、1920年代には、日本の音楽文化も多様化し、レコードも普及し、西洋音楽、多種のポピュラー音楽もそこに含まれるようになるので、金氏が使う「日本音楽」の概念について、より詳細な説明が欲しかった。他方、金氏が取り上げたラジオ番組と人形浄瑠璃、歌舞伎などの音楽ジャンルにおける通時的かつ詳細な分析からは、日本と朝鮮の間の音楽史的な関係が浮かびあがるであろう。氏の研究の更なる進展に期待したい。

■会員の声 投稿募集■

1. 次号締切: 2023年2月10日 (3月上旬発行予定)

2. 原稿の送り先および送付方法:

東日本支部事務局

E-mail: tog.higashi@gmail.com

3. 字数・書式: 25字×8行以内(投稿者名明記のこと)

4. 内容:会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会などの情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。

※原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただきます。ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

■定例研究会発表募集 (2月例会)

東日本支部では、会員の皆様による活発な研究活動のため、定例研究会での研究発表を募集しております。

発表をご希望の方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、11月20日までに、東日本支部事務局までお申し込み下さい

(tog.higashi@gmail.com あてメール添付)。なお、発表希望を提出後1週間経ても東日本支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

■編集後記■

今号では、6月(修士論文・博士論文発表)、7月(研究発表)にオンラインで開催した例会についてご報告しています。オンライン例会につきましては、関係各位の皆様のご尽力に感謝を申し上げます。

東日本支部では、今後も研究発表や企画など皆様からのお申込みをお待ちしております。対面での授業も進められていることと存じますが、もうしばらく、例会はオンラインでの開催となりそうです。本誌での「会員の声」にも情報をお寄せいただき、積極的にご活用ください。次号の発行は3月上旬を予定しております。(NS)

発行: 一般社団法人 東洋音楽学会 東日本支部

編集: 尾高暁子、奥山けい子

倉脇雅子、齊藤紀子、佐藤文香

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307号

東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail: tog.higashi@gmail.com
